

Ⅱ 遺 跡

1. 遺跡の概観

今回の調査地は、平城京廃絶以降田地となったと考えられる地区で、地形はほぼ平坦である。遺構は、主に地表下約20～30cmのところに堆積する地山面(Q085付近は暗灰褐砂質土、他は黄灰粘土)と奈良時代中期以降と考えられる整地土(暗黄褐粘質土)で検出した。検出した遺構の大半は奈良時代と思われ、柱掘形の深さや溝等の遺存状況からみて、全体的に後世の削平をうけたと判断される。

しかし、遺構の保存状態は良好で、多数の柱掘形、土壇、井戸等が検出され、これらを検討した結果、平城京左京四条二坊一坪は奈良時代初頭から奈良時代後半期にかけて宅地として利用されたことが明らかとなった。

この坪は、奈良時代の前期・中期・後期の少なくとも3期に宅地割や住い方が変わっている。

奈良時代前半期は、この坪は堀SA2590などから考えてすくなくとも南北に四分されていて、各敷地には、小さい柱掘形をもつ建物があった。奈良時代中頃には、この坪は一坪を占める宅地となり、相当身分の高い人物の邸宅と考えられる。奈良時代後半には、一坪の宅地は踏襲されたものの大きい建物はなく、八角形井戸が築かれる。

出土遺物は、土器・瓦・埴の出土が多く、軒瓦では平城京内の邸宅で使用された軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせの一つを確定できた。埴の出土は、京内では類例が少なく、八角井戸SE2600や土壇SK2591、SK2597に集中して出土し、他にも柱掘形から出土したが、いずれも遺構に直接関係するとは思われない。

2. 遺 構

発掘区の遺構は大別して、古墳時代・奈良時代・奈良時代以降に分かれる。古墳時代の遺構には溝・土壇がある。奈良時代の遺構には、掘立柱建物5棟や掘立柱の東西堀2条・南北堀が4条あり、2～3個の掘立柱穴が並ぶ堀も多い。この他に八角井戸、土壇がある。奈良時代以後の遺構には、中世以降の土取穴と思われる円形の穴や、近世から近代にかけての井戸や性格不明の土壇がある。

奈良時代の遺構

発掘区で検出した遺構は、ほとんどが奈良時代の遺構である。奈良時代の遺構は重複関係から、すくなくとも三時期に分けて考えることができるが、時期不明の遺構もある。三時期を、A期・B期・C期として各時期の遺構を述べる。

A期の遺構 坪の南北を四分する堀、小さい掘立柱建物2棟がある。

SA2590 発掘区中央部の東西堀で、9間分を検出した。東西にさらに伸びると思われる。柱掘形は一辺1mほどと大きく、検出した柱穴10ヶ所のうち4ヶ所には柱根がのこっていた。柱は径

H-59.60

图3 遺構配置図

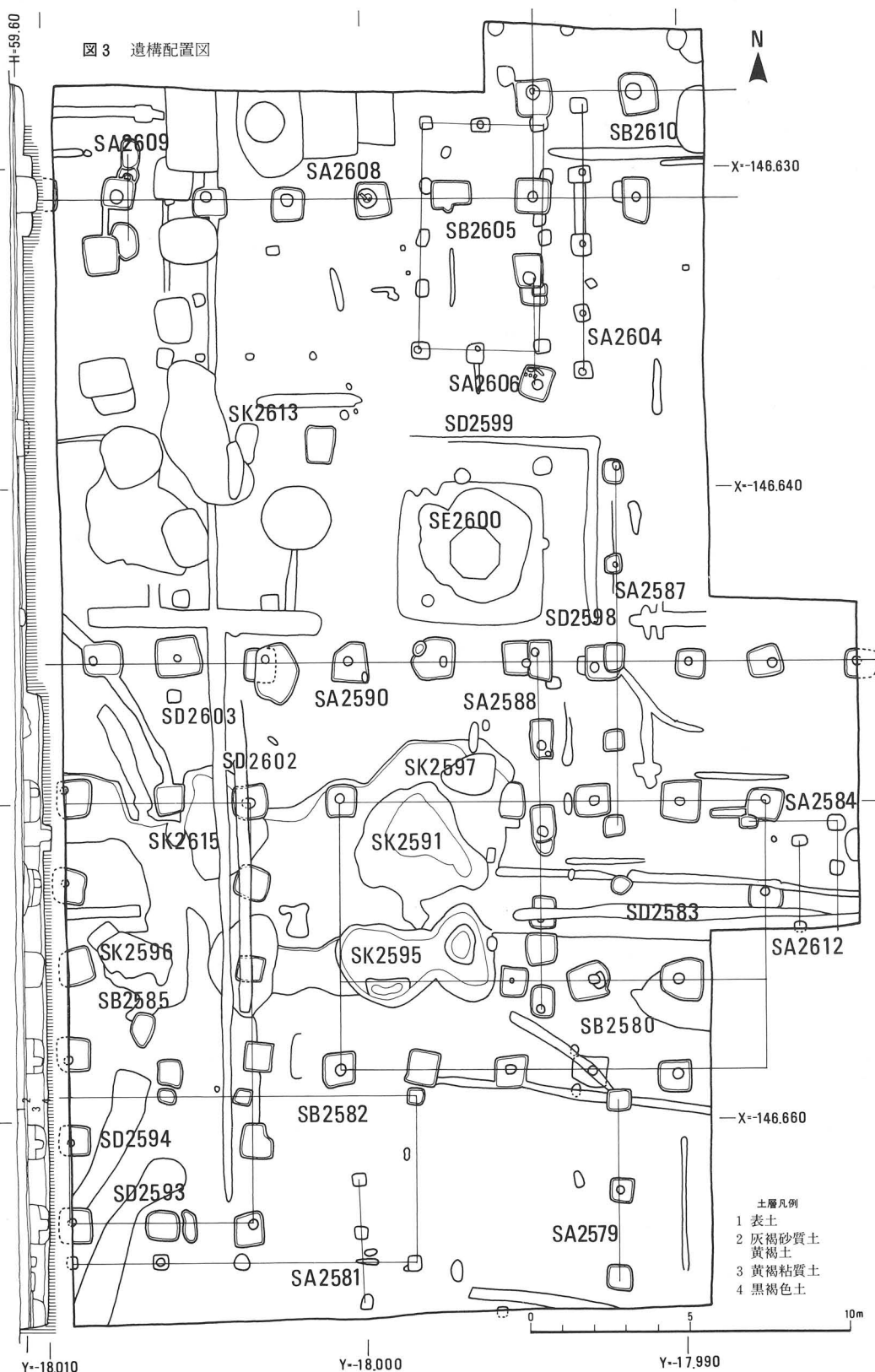
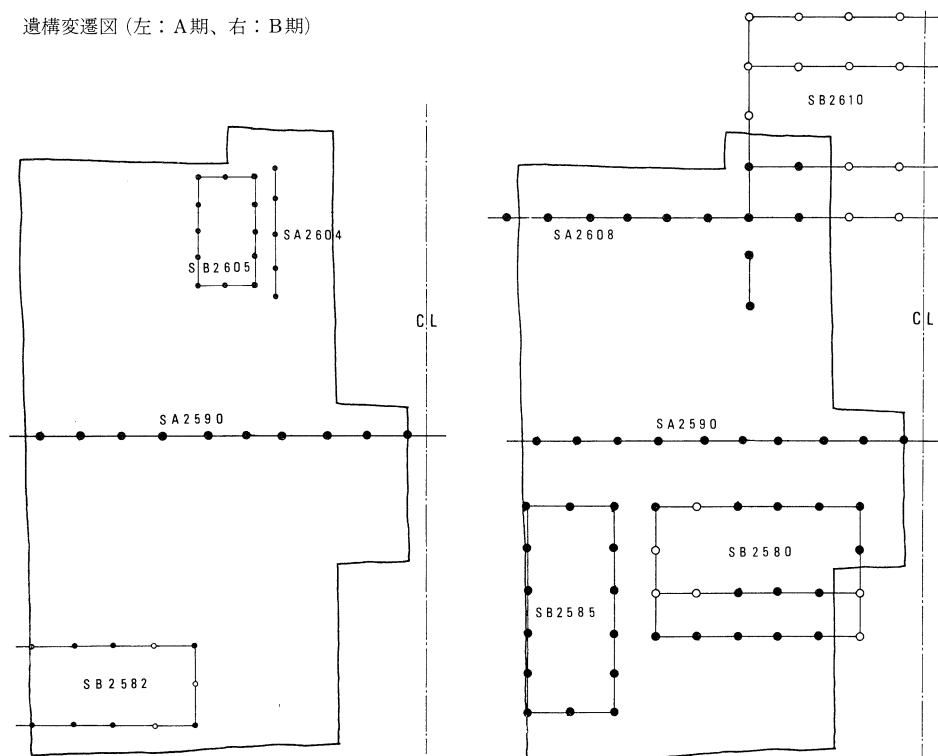


図4 遺構変遷図(左:A期、右:B期)



24～30cmである。柱間寸法にはばらつきがあるが、平均すると、2.65m（9尺：天平尺 以下同じ）である。この堀は坪を南北に4等分する南から1番目の位置にあり、地割の堀と考えられよう。時期を決める手掛りは乏しいが、B期の建物群との共存や、また八角形井戸SE2600との共存は考えにくく、A期とした。

SB2605 発掘区北方の小規模建物で、桁行4間・梁行2間の南北棟建物である。柱掘形は一辺40cmほどの方形で小さく、柱痕跡は直径21cmである。東西堀SA2608の柱掘形との前後関係から、SB2605が古い。建物は、北で東にすこし振れる。

SB2582 SB2585の南端部で、SB2585に重複する東西棟の掘立柱建物を検出した。西妻を検出していないので、この建物は西の未発掘区に伸びていると考えられ、桁行4間以上・梁行2間の建物である。柱穴は削平されているが、7ヶ所を検出し、一辺40cmほどの隅丸方形である。柱痕跡が1ヶ所のこり、その直径は21cmである。柱穴の重複関係はなく、時期を決めるてがかりは乏しいが、SB2605に共通して柱穴や柱径が小さく、A期とした。

SA2609 発掘区の北西にある掘立柱穴2つで、南北に並ぶ。遺構の時期や性格は不明である。南柱穴がB期の堀SA2608に壊されているので、A期とした。

SK2613 井戸SE2600の西方にある土壌で、埋土から出土した遺物からA期と推定される。

B期の遺構 柱掘形が1mほどの掘立柱建物3棟・東西堀1条があり、この時期の建物や堀

は計画的に、整然と配置したと考えることができる。

SB2610 発掘区の北東隅にある掘立柱建物で、建物の西南隅を検出した。柱間寸法は桁行・梁行ともに3.27m（11尺）と大きく、桁行は5間か7間と考えられ、後に述べるように、左京四条二坊一坪の中軸線を考慮すると、この建物は桁行7間と推定され、梁行は平城京で検出されている諸例から南北2面庇付の4間と考えられる。柱掘形は一辺1mほどの方形で、柱根が3ヶ所にのこり、径は28cmである。

SA2608 SB2610の南側柱に取り付き、同柱筋の西延長上にのびる掘立柱東西塀で、6間分を検出した。発掘区の西壁に柱穴がかかっているのも、この塀はさらに西にのびる。柱掘形は1mほどである。柱間寸法は2.65m（9尺）である。

SB2580 桁行5間・梁行2間の身舎に南北2面庇のつく東西棟建物である。柱掘形は一辺80cmほどの方形で、身舎にあたる柱筋で9ヶ所、庇にあたる柱筋で5ヶ所を検出した。柱穴のうち12ヶ所に柱痕跡がのこり、直径は27～30cmである。柱掘形の深さは遺構検出面から身舎40cm、庇10cmほどで庇の柱筋にあたる場所は浅い。身舎の西辺部は土壌SK2591などで破壊されていて柱穴はのこっていない。柱間寸法は桁行2.65m（9尺）、梁行2.85m（9.5尺）である。

SB2585 庇がつかない建物と考えられ、桁行5間・梁行2間の南北棟建物である。SB2580の北側柱とこの建物の北妻柱筋は揃っている。西側柱は5間分すべてを検出したが、柱穴の西半分は発掘区外にある。建物の北東部分は土壌SK2615や整地層で破壊されているが、柱穴はかろうじて検出できた。柱掘形は一辺80cmほどで、建物SB2580の柱掘形とほぼ同じ大きさである。柱掘形の深さは西側が80cmほど、東側が20cmほどで西側が深い。柱間寸法は桁行南2間が2.6m、北3間が2.8mと北3間がやや広く、梁行は2.8mである。

C期の遺構 この時期の遺構は、B期の遺構が廃絶した後に発掘区の南中央で、土壌群SK2591・SK2595・SK2597を掘削して土器片・瓦片を投棄し、埋めて整地している。整地層は二棟の建物SB2580・SB2585の間あたりから南東へと広がり、発掘区外にさらに続いている。この大規模な整地とほぼ同時期に八角形井戸SE2600が発掘区中央に掘削される。

SK2591・SK2595・SK2597・SK2596・SK2615 掘立柱建物SB2580・SB2585の廃絶後に掘削された土壌群である。これらの土壌の埋土には奈良時代中頃の遺物を多く含んでいた。とくにSK

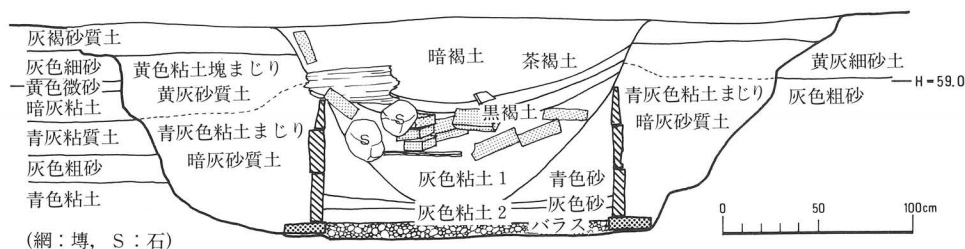


図5 井戸SE2600断面図(左:北、右:南)



写真6 SE2600の上層の状況

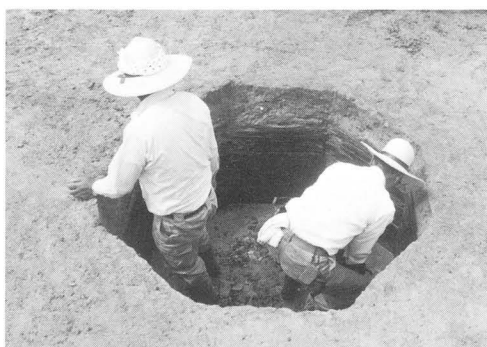


写真7 井戸掘り下げ作業



写真8 井戸枠取り上げ作業



写真9 井戸枠下の埦

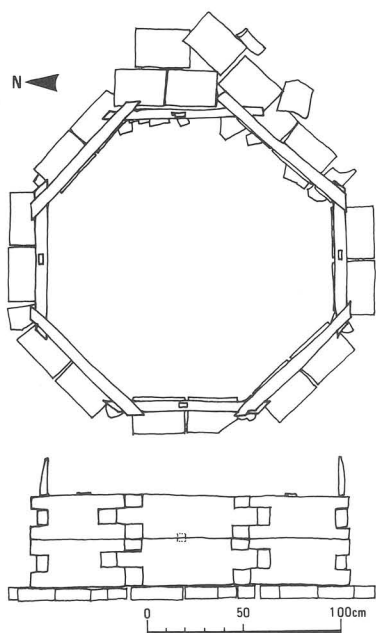


図10 井戸枠実測図
〈多角形井戸の出土例〉

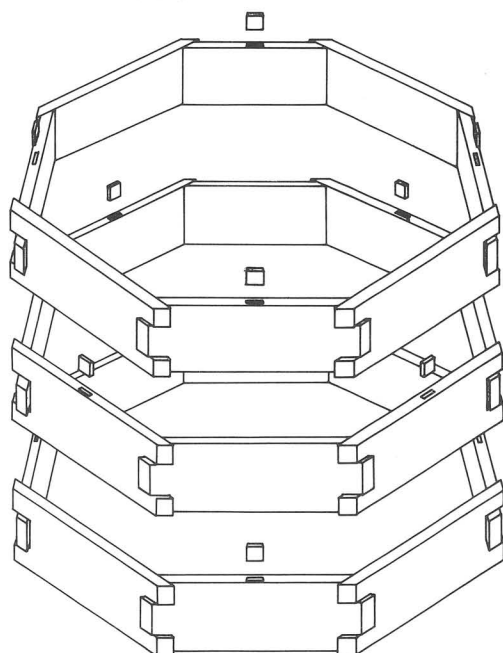


図11 井戸枠組み上げ模式図

六角形井戸・『橿原 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第17冊』 昭和36 奈良県教育委員会

多角形井戸・草戸千軒町遺跡 『草戸千軒町遺跡の井戸 I、II、III』 小都 隆「草戸千軒 No.43、No.49、No.54」

平城京左京二条七坊三坪 『奈良女子大学構内遺跡 発掘調査概報Ⅱ』 昭和58 奈良女子大学



写真12 井戸枠墨書

2591・SK2597は大量の遺物を含んでいた。遺物についてはⅢ章で述べる。

SE2600（表紙、口絵、写真7～15、挿図5～11）直径1.5m、一辺59.5～64.5cm、深さ1mほどの平面八角形の井戸である。埦を八角形に一段並べ、埦の上に八角形に木枠を組み上げている。木枠は下三段目まではぼのこり、四段目が三辺に一部のこっていた。一段目は高さ25.5cmと揃っているが、二段目から高さは不揃いである。板の厚さは6cmほどである。各辺の組み合わせは東西南北の4辺は両端を凸形とし、斜辺は両端を凹形として、凸部を挿入し八角形に組む。上下の木枠は4辺ずつ交互に太柎で固定し、ずれを防いでいる。太柎の位置は一段目と二段目の間では東西南北の四辺、二段目と三段目の間では斜辺に置いている。すなわち、段ごとに互い違いになる。太柎は枠板の上面ほぼ中央にあり、6×6cm、厚さ2.5cmである。井戸底には埦が隠れる高さまで小砂利が敷きつめてある。埦の下には一部に瓦をかませている。埦の上端面を水平に揃えるためであろう。

この井戸の掘形は枠板から80～90cm外にある。井戸枠から1.5～1.7m離れて、掘形の外で落ちがある。この落ちは、高低差約10cmで井戸を囲うように1辺約4.5mの方形になっている。井戸の周辺が埦敷きになっていた痕跡と考えられる。

この井戸の掘削時期は、掘形埋土から出土した遺物から天平末年と考えられ、また廃絶の時期は井戸底の埋土の出土遺物や上層の出土遺物から、奈良時代末期には埋められ、平安時代にはいって完全に廃絶したと考えられる。

〈呪符・祭祀の参考文献〉

水野正好 「竹筒をのこした一井とその秘呪」 『草戸千軒No36』 1976

水野正好 「三宝荒神符と天中の呪符」 『草戸千軒No47』 1977

水野正好 「金貴大徳の呪句と埋井の呪儀」 『草戸千軒No50』 1978

『古代研究18』 「鎮壇・呪符の特集」 1978

兼康保明 資料紹介 「井戸における斎串使用の一例—滋賀県高島郡高島町鴨遺跡の井戸—」 『古代研究19』 1980

水野正好 「鎮井祭の周辺」 『奈良大学紀要第十号』 1981

林 博通・栗本政志 「近江国府関連官衙遺跡の調査—大津市瀬田野畑遺跡の調査概要—」 『古代文化』 1983.1

井戸掘形の中で、木杵に接して棒片が各辺で発見された。棒片は垂直に近い状況や横になった状況で木杵にへばりつくもの、ややはなれるものなど厳密には状況は一様ではないが、これらの棒片は井戸開鑿時の祭祀に関連したものと考えられる。

なお、井戸杵の東1段目の外面に右記の墨書が「可
あつた。祭祀に係わる字か、習書であるのかはき 宗 □
めがたい。 □
(顯カ)地地池池□□人□□」

SD2598・SD2599 八角形井戸から東と北それぞれに1.5mほど離れて南北溝SD2598・東西溝SD2599がある。溝の幅30cm、深さ10cmと小さく浅い。井戸を囲うようにあり、SE2600の排水処理に関連するかもしれない。

SA2588・SA2606 南北塀SA2588はSE2600の南にあり、4間分を検出した。この掘立柱塀の柱掘形は南北に長い長方形である。5つの柱穴のうち4つに柱根がのこっていた。柱間寸法は2.8m(9尺)である。SA2588の北延長上に南北塀SA2606がある。一間分しか検出していないが、柱間は2.8m(9尺)である。南の柱穴には柱根がのこっていた。このふたつの塀は井戸SE2600をはさんで同一線上にあり、同じ塀の南北とも考えられるが、SA2606の柱穴は正方形に近く、SA2588とは異なり同一の塀かどうかは決めがたい。

SA2579・SA2587 掘立柱の南北塀SA2579は発掘区の東南にあり、2間分を検出した。柱掘形は一辺60cmの方形で、柱間寸法は2.8mである。SA2587はSA2579の北延長にある掘立柱の南北塀で4間分を検出した。柱掘形は一辺60cmほどの方形で柱間寸法は2.8mである。この2つの塀は同一線上にあり、柱間寸法も揃い、柱穴が未検出の所でも2.8mの柱間寸法で割り付けることができるので、同一の塀かもしれない。

その他の奈良時代の遺構

SA2581 発掘区南端中央にある小さい掘立柱穴の南北塀で、2間分を検出した。

SA2584 SB2580の東にある折れ曲った掘立柱の塀である。

SA2612 SB2580の東にある掘立柱の南北塀1間分である。

SA2604 SB2605の東にある掘立柱の南北塀で、4間分を検出した。A期の可能性がある。

SD2614 発掘区南端にある東西溝である。

SD2601 SA2590の北1mほどの発掘区の西寄りにある。溝幅約80cm、深さ10cmほどである。

古墳時代の遺構

SD2593・SD2594 発掘区の西南で検出した斜行する溝である。溝幅は約80cmあり、黒褐色土の埋土でよくしまり、古墳時代の土師器・埴輪片を含む。この溝と同じ埋土の南北溝がSB2580の東北隅付近に重複しており、7世紀代の須恵器が出土している。

奈良時代以降の遺構

SD2602・SD2603 発掘区の西寄りにある南北溝で、SD2602から奈良時代の遺物が出土している。

土取穴群 発掘区の北半部の西寄りで円形の穴を多く検出した。粘土を取るための土取穴で、中世以降の穴である。

近世・近代の井戸・土壌 発掘区の北端中央部で近世～近代の井戸や性格不明の土壌を検出した。耕土直下の土層から掘削されていて、いずれも新しい。

3. 占地と建物配置

検出した遺構を手懸りにしてこの坪の建物配置を考察する。

今回調査した地区は、平城京左京四条二坊一坪の中央西寄りにあたる。検出した遺構は国土調査法による国土方眼第六座標系で実測しているので、建物群が坪内のどういう位置にあたるかを考察するために、まずこの坪の位置を同じ座標系上で復原してみたい。平城宮周辺や平城京の発掘調査でえられた既知の成果を利用して求める。平城宮跡第39次発掘調査で検出した二条条間路と東一坊大路の中心線の交点を起点として、朱雀大路発掘調査で明らかになった朱雀大路の振れ(N 0° 15' 41" W)を東一坊大路の振れに適用する。1尺=0.296mと想定し、一坪の一边は450尺であるから、左京四条二坊一坪を四周する道路の中心線の交点の座標値は表2のようになる。この座標値から、坪の中軸線や四分分割線を得ることもできる。

SB2610は発掘区では建物の一部を検出したにすぎないが、この建物の柱間寸法は桁行・梁行とも11尺で、平城京の宅地の建物のうち大型の建物に見られる10尺間よりもさらに大きい。これほどの柱間をもつ建物は坪のうちでも中心的な建物であろう。しかも、この建物は坪のほぼ中心

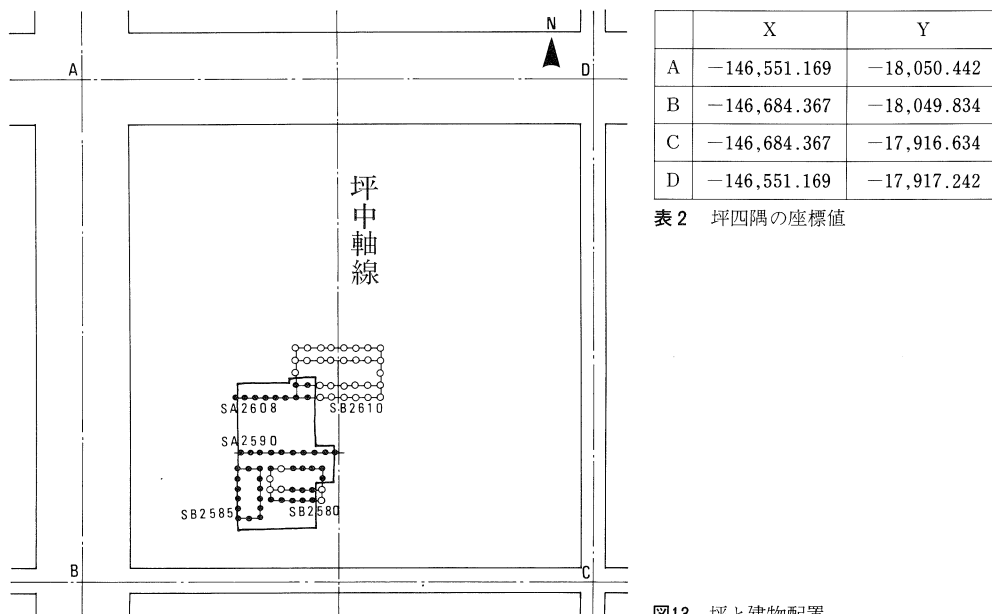


表2 坪四隅の座標値

図13 坪と建物配置

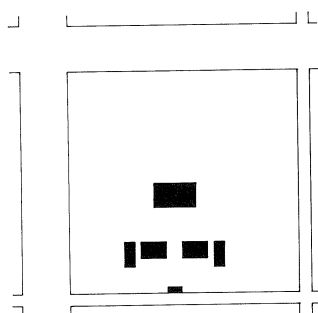


図14 坪中心部の
推定建物配置

藤原京・難波京の宅地班給例

藤原京の宅地（持統5年12月）	
右大臣（従二位）	4町
直広式（従四位下）以上	2町
大参（正五位上）以上	1町
勒（正六位上）以下	上戸 1町
〃	中戸 ½町
〃	下戸 ¼町
難波京の宅地（天平6年9月）	
三位以上	1町以下
五位以上	½町以下
六位以上	¼町以下

にあり、坪内の位置や柱間の大きさからSB2610を主屋とみなすことができる。坪の中心にある主屋は南面する東西棟の事例が多く、SB2610も東西棟と考える。東西棟と考えると、坪の中軸線・柱間寸法を勘案し、桁行7間と考えると建物の中軸線と坪の中軸線が一致する。また梁行は平城京で検出している主屋と考えられる建物には2面庇の事例が多いので、この建物も南北2面庇付の梁行4間の建物と推定すると、SB2610は桁行7間・梁行4間となり、柱間寸法にふさわしい大型の掘立柱建物となる。SB2610は坪の中心に位置するので、SB2610が存在する期間は、この坪は分割されず宅地は1坪を占めたことになる。

SB2580の東妻は坪の中軸線から15尺隔たり、桁行9尺なので西妻は60尺隔たることになり、この建物を主軸線から計画的に配置していることがわかる。SB2585は北妻柱の柱筋をSB2580の北側柱筋に揃えていて、この2棟は計画的な配置で同時に存在していたと考えられよう。SB2610も坪の中軸線上にあり、SB2610・SB2580・SB2585の3棟は坪の中心区画に計画的に配置しているのであろう。門の位置については推定するほかはない。この坪は左京四条二坊の西北隅で、北は三条大路に、西は東一坊大路に面する位置にあたる。京内の大路に面する宅地では一般に大路に家門を開くことは禁じられており、この坪の検出遺構を勘案すると、家門は南に開くと考えるのが妥当である。坪の中軸線に対称に建物を配置していると考え、家門を南とすれば、この坪の建物配置は図14のようになり、SB2610を主屋、SB2580は西前殿、SB2585は西脇殿とでも呼べよう。なお、もしSB2610が南北棟建物であれば、家門を東に開く建物配置となろう。

宅地が一坪全体を占めることや、建物配置、主屋の規模などから、この坪は身分が相当高い人物の邸宅跡と考えられよう。この邸宅の建物配置はコの字型建物配置の変形である。平城京内でこれまで検出された邸宅の建物配置は、主屋と脇殿を計画的に組み合わせたコの字型の事例が多い。一方、平城京左京五条二坊十四坪で検出した邸宅のように、コの字型建物配置の変形の事例もある。平城京の邸宅の建物配置には厳密なコの字型建物配置ばかりでなく、前述の事例や本調査のような変形のコの字型建物配置があったと考えてもよいであろう。